

神様への信仰と 感謝を常に告白する

申命記26章1～15節
2021年5月9日
松田 基子 師

わたし達は、一年以上、新型コロナウイルス感染危機の中におかれています。広島も感染拡大が懸念されています。感染が始まって以来、行動制限が課された事によって、今まで当たり前とされていたことが出来なくなりました。感染拡大地域の教会は、会堂に共に集まることが出来ないで、オンラインによる自宅礼拝が行われています。自粛期間が長引けば長引くほど、オンライン礼拝をしている信徒さん達は、
「一日も早く会堂に共に集まって、心の底から主を賛美したい。」
と言っておられます。

「今まで日曜日に教会に行くのは、当たり前でした。時には、行きたくない日もあり、休みたい気持ちを抱えながら、義務的に行ったこともありました。でも、今は教会に行けることは、神様の恵みであったし、生かされ、全ての必要が与えられていることは、当り前の事ではなくて、神様からの恵みなのだと言う事を、改めて教えられました。神様に対して今まで何と感謝が足りなかったことかと悔い改めています。」
と言う声が聞かれました。

また、反対に、
「神様は何時迄このままの状態を続けさせられるのでしょうかね・・・。」
と言う人もいました。問題はそんなに簡単ではありませんが、神様は決してこの状況を、ただ成り行き任せに、眺めておれるものではありません。神様は人類が、この危機を乗り越えて行けるように、知恵を与え、必要を与えて、誰よりも働いて下さっています。地球が尚も保たれているのは、人間の搾取で傷ついた地球を、神様が繕ってくださるからに他なりません。わたし達がこ

の危機を乗り越えて行けるかどうかは、この神様への信頼と信仰に掛かっています。

神様はご自身の愛の受け取り手として、命を与え、愛を注いで、世に送り出した、人間一人ひとりに対して、どれ程、心に掛け、愛を注いで居て下さるのでしょうか。神様が如何に恵み深いのか、わたし達はその事を心底分かって居るのでしょうか。人生は、神様が如何に恵み深いお方であるか、その事を知るために、生かされていると言っても良いでしょう。しかし、人間は何と人生において、神様への感謝よりも、
『あれが欲しい、これが欲しい。』
ああしてくれない、こうしてくれない。』
と不平不満、呟きに満ちている事でしょうか。せつかく与えられた人生を、そのように生きてはなりません。わたし達は今朝、その事について聖書に聴いて参りましょう。

さて、神様の恵みに、心を向けて神様に感謝をするよりも、
「あれが無い、これが無い。」
「肉が食べたい。魚が食べたい。」
「キュウリ、メロン、葱や玉葱、ニンニクが食べたい。」
と、生かされている感謝よりも、不平不満、呟きに生きた、出エジプト第一世代のイスラエル人達は、自分達が呟いた、
「エジプトの国で死ぬか、この荒れ野で死ぬ方がよほどましだった。」
と言った、その言葉の通り、40年の荒れ野の放浪生活の中で、モーセ、ヨシュア、カレブを除いて皆、死んでしまいました。

一方、モーセに導かれて、神様以外に頼るものがない、厳しい荒れ野の環境に置かれ、神様の御言葉を信じて従う、訓練を受けた第二世代は、約束の地、カナンの手前ヨルダン川を隔てた、モアブの平野まで、辿り着くことができました。神様が、モーセの使命はそこまでとお告げになった事により、モーセはイスラエルの民に、申命記12章1節で、

「これから述べる掟と法は、あなたの先祖の神、主があなたに与えて得させられる土地で、あなたたちが地上に生きている限り忠実に守るべきものである。」

と命じて、カナン定着後の神様に従う生き方を教えました。

そして、今朝の聖書箇所、申命記26章は、そのまとめの部分となっています。第二世代は、これから愈々(いよいよ)ヨシユアを指導者にして、ヨルダン川を渡って、神様が先祖に与えると約束されたカナンの地に入っていくのです。その彼らが一番心に刻み、神様に感謝しなければならない事は、神様は約束を必ず果たして下さるお方である事。それも、世界の創造主、歴史の真の導き手として、約束を成就される、真実なお方であるということです。

モーセはこれからのイスラエルに命じました。26章1節から、

「あなたの神、主が嗣業の土地として得させるために与えられた土地に、あなたが入り、そこに住むときには、あなたの神、主が与えられる土地から取れるあらゆる地の実りの初物を取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に行きなさい。」

とあります。これから入っていく土地は、神様が彼らより7、8百年も前に、先祖アブラハムに創世記17章8節で、

「わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる。」

と約束された土地なのです。ここには、神様が必ず約束を守って下さる、真実なお方である事が先取りされています。

また、神様はただ、約束を守られるだけではありません。その土地は豊かで、多くの実りを与えてくれるのです。その時彼らが先ず、覚えなければならないことは何でしょうか。それは

彼らにとって、カナンの地に定着し、生活できることは

「当たり前的事では無い」

と言う事をまず自覚させ、神様への感謝を生活の土台とさせることでした。人間の傲慢は、何処からくるでしょうか。本来人間は、神様に造られたものであり、生かされ与えられている**全てのものは、神様がお与え下さったものであり、神様への感謝に常に溢れているべきです。**そこから離れるとき、人は傲慢になり、自分に頼り、罪を犯して行きます。

そうならない為に、

『土地も産物も、自分自身も、神様のものであり、豊かに養われるのは、神様の憐れみですと言う表明をすべきです。その表明に、初物は神様に献げるように』

と命じました。それを、

「あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に、」

つまり、中央聖所に持って行くようにと、命じられています。そこで、神様を礼拝するのですが、それはただ、初物を献げれば良いと言うものではありません。モーセは、

「そこで神様から与えられた恵みを言い表しなさい。告白しなさい」

と命じています。

先ず告白すべきことは、礼拝を取り継ぐ祭司に向かって、26章3節に、

『今日、わたしはあなたの神、主の御前に報告いたします。わたしは、主がわたしに与えると先祖たちに誓われた土地に入りました。』
と言いなさい。」

と命じられています。生ける神様は、歴史の真の支配者として、誓った事は千年を超えても、必ず成就して下さるお方である事を言い表す。

「約束を成就してくださいました。」

と言う事を告白し、聖名を讃えなければなりません。

人間は、地上の一齣しか生きることが出来ないために、神様の大きなご計画の実現を見る事

が出来ないで、信じようとはしませんが、そこを越えて、信じて賭けていくことが、信仰です。人生は自分の安逸のためにあるわけではありません。神様の御計画に用いられて行くためです。しかし、だからと言って神様は、人間をただの駒として、お使いになるわけではありません。何時も見守り、助けの手を差し伸べ、更に勝った祝福へと、導いて下さいます。モーセはその歴史的事実について、5節に、

「あなたは、あなたの神、主の前で
次のように告白しなさい。」

と命じています。

それは、神様のイスラエルに対する守りと導きの確かさを告白するものです。先ず、

「わたしの先祖は、滅び行く一アラム人であり、
わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに、
寄留しました。しかしそこで、強くて数の多
い、大いなる国民になりました。」

と言わせています。

ここでは具体的には、族長ヤコブを指していますが、彼の祖父、アブラハムは、南バビロニア、カルデアのウルから、父、テラと共に北シリアの都市、ハランに移住して、そこで神様からの召しを受けて、カナン地方へと導かれました。彼はアラム人と呼ばれました。このアブラハムが通った肥沃な三日月地帯、それはメソポタミアのチグリス、ユーフラテス川の沿岸を北上して、シリアから南下し、パレスチナまで、この地域を当時、アラム地方と呼びました。その地域にいた人達がアラム人と呼ばれました。岩波訳では、

「わたしの先祖は、さすらう一アラム人
でありました。」

と訳されています。さすらうと言う以外に、

「滅びる、消え失せる」

などの意味もあるそうです。

ここでは、強くて数の多い、大いなる国民となったという事のその対比として、如何にその初めが無名であったかと言う事を言っています。アブラハム、イサクは名もない一アラム人として、羊を飼いながら、さすらいの旅を続けましたし、

族長ヤコブは、何よりも、飢饉という滅びの危機を逃れて、そこからさすらいの民として、一族70人で、エジプトに寄留しました。

その彼らを、神様は先祖アブラハムに約束された通りに、400年の後、空の星のように、大地の砂粒の様に数を増し、強くて数の多い、大いなる国民にして下さいました。神様は約束を守られるお方です。しかし、人間の権力者は、その邪魔をします。6節に、

「エジプト人はこのわたしたちを虐げ、苦しめ、
重労働を課しました。」

とあります。イスラエル人はエジプトの奴隷として、自由を奪われ、過酷な労働を強いられ、苦しみました。そこで、彼らはどうしたのでしょうか。

7節に、

「わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げを御覧になり、力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととするしと奇跡をもって、わたしたちをエジプトから導き出し、この所に導き入れて乳と蜜の流れるこの土地を与えられました。」

と告白しています。神様はアブラハムとの契約の故に、その子孫を、ご自身の民に選ばれ、彼らに目を注ぎ、耳を傾けておられました。神様は常に、最も弱い立場に置かれている人々に目を注ぎ、耳を傾けていて下さいます。わたし達は時に、余りの悲惨さ、理不尽さを見せつけられますと、神様は何故働いて下さらないのだろうか、と思いますが、神様が見落とされる筈はなく、必ず、時が来たときに、救い出して下さいます。神様はエジプトに対して、大いなる、恐るべき10の奇跡を起こして、イスラエルを奴隷の家から、救い出して下さいました。そればかりではなく、先祖に誓われた約束の地へ導いて下さいました。それは40年の荒れ野の放浪生活を通らなければなりませんでしたが、それは彼らが、神様を畏れ敬い、御言葉に聞き従って幸いを得るために、通らなければならなかった訓練の場、恵みに変えられた道でした。

神様が約束して下さった地は、乳と蜜の流れる地だと、表現されています。つまり、乳を豊かに搾ることの出来る、羊達が増えて行く、豊かな牧草地がある所であり、蜜は、なつめやしやイチジク、葡萄など農産物を豊かに産する事ができる、肥沃な土地だと言う事です。イスラエル人は末代まで、神様が自分達を愛し、どれ程良くして下さいたかを、語り継いで行かなければなりません。

詩編103篇2節には、

「わたしの魂よ、主を讃えよ、主の御計らいを
何一つ忘れてはならない。」

とあります。今あるは神様の恵み、その事を決して忘れてはならないのです。モーセはイスラエルに信仰告白として、自分達民族への神様からの恵みを、決して忘れないように、神様に祝福された、民族の歴史を告白させたのです。しかし人間は、生来自己中心で、自分に取り込み、もの惜しみをします。そんな人間も、神様から与えられたものであると言うことが分かる時に、互いに分かち合う心が生まれます。レビ人や寄留者は、土地を持って居ませんでしたから、土地からの産物を得る事は出来ませんでした。

そこで、彼らに分かち合い、

『共に主を喜ぶ事を、主が求めておられる』
と言う事をモーセは教えました。12節からは、3年目には、中央聖所に持って行くのではなくて、住んでいる町のレビ人、寄留者、孤児、寡婦に施すために、収穫の10分の1の献げ物をするように、命じられています。神様からの恵みを忘れないで、それを告白することに依って、**誰も置き去りにされる事の無い社会**を造って行くのです。それが**神の民、宝の民とされた者の生き方**だとモーセは教えています。

わたし達はどうか。イザヤ書51章1節に、

「あなたたちが切り出されてきた元の岩、掘り出された岩穴に目を注げ」

とあります。わたし達は自分が神様に背いていることも分からないで、自己中心に生きて、滅びに向かっていた者です。そのわたし達を神様は、イエス・キリストの福音に引き寄せ、十字架の贖いを与えて救い、神の子の身分を与えて下さいました。これこそわたし達が一日も忘れてはならない神様の大きな愛です。感謝仕切れない恵みです。それなのに、わたし達はよそ見をして、自己中心になってしまいます。そのようなわたし達の心を、神様への感謝にリセットする一つの助けは、**朝毎に使徒信条を告白し、福音の恵みに生かされている事を感謝する事**です。

わたし達はどんなに感謝しても、感謝仕切れない恵みを、神様から戴いているのです。部屋は放っておけばすぐに散らかってしまいます。心も意識していないと、すぐに**眩き**が出来来ます。朝に夕にイエス・キリストの十字架の贖いと、御子を賜った、神様の愛に感謝を告白し、どの様な困難の中も、神様の愛と恵みが注がれており、**全てのことは、相働きて益となることを信じて、乗り越えて行こう**ではありませんか。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は御子イエス・キリストまで、わたし達の救いのために、お与えくださったと言うのに、わたし達は多くの事を眩きます。この罪をお許し下さい。

朝に夕に神様が与えて下さった御救いに、絶対的な価値を置いて、神様への心からなる感謝を告白する者とならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。